

久津川古墳群における後期古墳の様相

－芝山古墳群の発掘調査成果から－

小泉 裕司

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

久津川古墳群における後期古墳の様相

－芝山古墳群の発掘調査成果から－

小泉 裕司

1. はじめに

久津川古墳群は、宇治市南部の伊勢田・広野地域から城陽市富野地域にかけて広がる京都府内を代表する古墳群である。南北にのびる宇治丘陵から木津川へ流下する三つの河川（北から名木川・大谷川・大河原川）が形成する扇状地と両岸丘陵上に立地する100基以上の古墳から構成される。三つの河川の流域ごとに支群に分けることができ、宇治市広野地域の名木川流域の丘陵上及び丘陵先端の低台地上とその北側の宇治市伊勢田地域の低台地状丘陵に立地する広野支群、城陽市平川・久世地域の大谷川扇状地上とその両岸丘陵上に立地する久世支群、城陽市富野地域の大河原川流域の両岸丘陵上とその南側の低台地状丘陵上に立地する富野支群である。

2. 発掘調査成果

(1) 芝山古墳群の概要

芝山古墳群は、城陽市富野にあり、富野支群を構成する古墳群である。昭和52年度の芝山遺跡の調査で一辺約11mの方墳1基が検出され、その後の調査（昭和60年度・平成6年度）で10～20mの方墳や円墳が13基検出された。これらのことから、芝山遺跡には削平された10～20mの方墳や円墳が多数存在することが想定され、芝山遺跡で検出された古墳を芝山古墳群として取り扱うようになった。令和5年度までの調査で、4世紀前半～7世紀初めに築造された10～20mの方墳や円墳が39基検出されている。古墳群は標高50～58mの上位平坦面と標高35～38mの中位平坦面に築造されており、その立地から6支群（I～VI支群）に分かれる。

また、芝山遺跡内には4世紀後半から5世紀初めに築造された梅の子塚1号墳（前方後円墳、全長87m、粘土槨）と梅の子塚2号墳（前方後円墳、全長65m）が所在する。これらは、富野支群では卓越した規模をもつ古墳時代前期の有力首長墓であることから、芝山古墳群には含めない。

I支群は中位平坦面に築造された最大の支群で、方墳5基、円墳15基、楕円形墳2基の

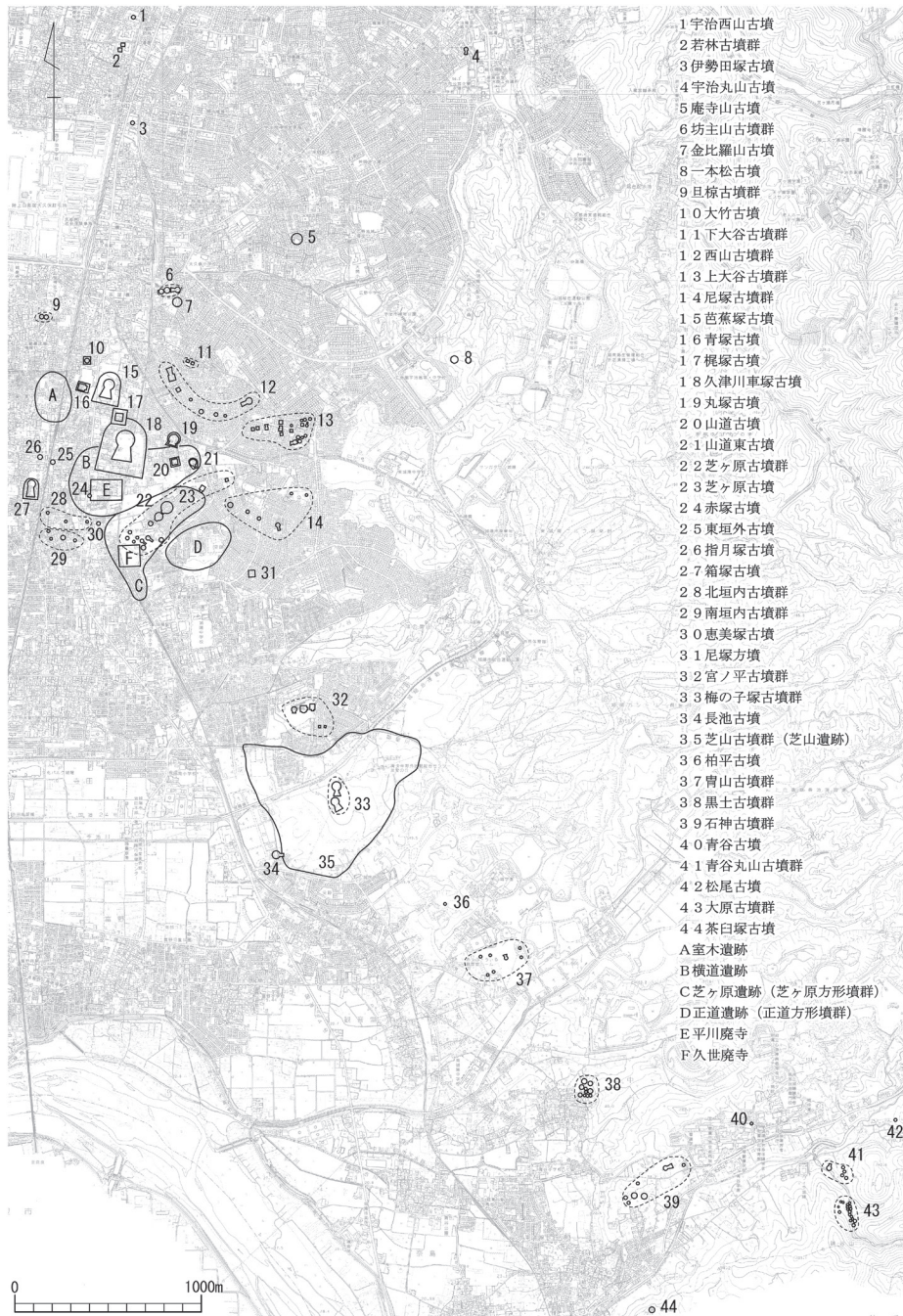


図1 久津川古墳群と周辺の古墳分布図
 久津川古墳群 1～3・5～36、周辺の古墳 4・37～44



図2 芝山古墳群支群分布図

22基（I-1～22号墳）が検出されている。I-18号墳は土砂採取で墳丘の北西側が削平されるが、周溝の検出状況から造り出し付きの円墳或いは前方後円墳と考えられる。丘陵先端に築造されたI-16号墳は丘陵のある東側のみ掘り割り状の周溝となるが、それ以外の21基は周溝をもつ。また、方墳1基と円墳3基は周溝の一部を検出したのみで、墳丘規模や築造時期は不明である。墳丘規模は、方墳が一辺7～11m、円墳が直径7.4～26.7m、楕円形墳が短径3～長径5mである。埋葬施設を検出したのは11基（方墳3基、円墳6基、楕円形墳2基）で、地山を浅く掘り込んだ墓壇に木棺を直接埋納した木棺直葬である。これらは、木棺を覆う程度の低い盛土を行った低墳丘墳と考えられる。埋葬施設が検出されなかった7基（方墳1基、円墳6基）は、墳丘盛土内に埋葬施設が構築されていたと推定され、墳丘をもつ高塚墳と考えられる。高塚墳の埋葬施設についても、周溝内などから石材の出土がなく、木棺直葬と考えられる。埋葬施設から出土した須恵器が陶邑編年TK23型式～TK217型式に相当することから、I支群は古墳時代後期に築造されたと考えられる。

II支群は上位平坦面の梅の子塚1号墳後円部東側に築造された一群で、周溝をもつ方墳4基（II-1～4号墳）が検出されている。II-1・2号墳は一辺が約11mあり、埋葬施設が検出されなかったことから高塚墳と考えられる。II-3・4号墳は周溝の一部を検出したのみで墳丘規模は不明である。II-1～4号墳の周溝内からは陶邑編年TK73型式とTK208型式に相当する須恵器が出土しており、古墳時代中期中頃～後半の築造と考えられる。

III支群は上位平坦面から中位平坦面への南西斜面裾部付近に築造された一群で、3基が検出されている。III-1号墳は一辺約17mの方墳で、埋葬施設が検出されなかったことから高塚墳と考えられる。周溝内からは円筒埴輪や形象埴輪（馬・靴・甲冑形）と副葬品と考

えられる鉄鏃・鉄鎌・刀子・滑石製紡錘車が出土している。Ⅲ-2・3号墳は周溝を伴わないため墳形は不明であるが、Ⅲ-3号墳は一辺6m程度の方墳の可能性がある。Ⅲ-2・3号墳は木棺直葬の埋葬施設が検出されており、低墳丘墳と考えられる。Ⅲ-2号墳からは蛇行剣2振が出土している。Ⅲ-1号墳は芝山古墳群で唯一埴輪を樹立した古墳で、出土した埴輪は川西編年埴輪Ⅲ期に相当し、築造時期は古墳時代中期前半と考えられる。Ⅲ-2・3号墳については明確に築造時期を示す副葬品はないが、古墳時代中期中頃を中心とした時期ではないかと考えられる。Ⅲ群は築造時期がほぼ同じ方墳ではあるが、墳丘の規模や形態には差異があり、またⅢ-1号墳とⅢ-2・3号墳は約80m離れており、支群としてのまとまりに欠ける。

Ⅳ支群は梅の子塚2号墳の前方部の南東側に広がる上位平坦面に築造された一群で、5基が検出されている。Ⅳ-1・2・4・5号墳は、南へ延びる舌状の平坦面に築造された低墳丘墳である。Ⅳ-3号墳はその東側にある南へ延びるやせ尾根の先端に築造された一辺16.8mの方墳で、墳丘北側には掘り割り状の周溝がある。地山を掘り込んだ埋葬施設は割竹形木棺を埋納した木棺直葬である。周溝内からは、壺形埴輪が出土している。構造上は低墳丘墳であるが、平地部との比高差が約15mあり、平地部からは高塚墳に見えることから、高塚墳としておく。Ⅳ-1号墳は一辺10.3mの方墳で、周溝をもち、埋葬施設は割竹形木棺を埋納した木棺直葬である。Ⅳ-2号墳は一辺15.8mの方墳で、周溝をもつ。3基の木棺直葬の埋葬施設があり、2基は割竹形木棺を埋納する。中央の割竹形木棺内からは、対置式神獸鏡などが出土している。Ⅳ-4・5号墳は周溝をもたないため、墳形及び墳丘規模は不明である。Ⅳ-4号墳の埋葬施設は割竹形木棺を埋納した粘土槨で、墓壙埋土最上層から方格規矩八禽鏡片が出土している。Ⅳ-5号墳の埋葬施設は割竹形木棺を埋納した木棺直葬で、棺内から出土遺物はなかった。Ⅳ-3号墳は周溝内から出土した壺形埴輪が川西編年埴輪Ⅰ期に相当することから古墳時代前期前半に築造されたと考えられる。Ⅳ-1・2・4・5号墳は築造時期を明確に示す副葬品はないが、銅鏡などから古墳時代前期後半～中期初めと考えられる。Ⅳ-3号墳は芝山古墳群形成の最初期に位置付けられる。

Ⅴ支群は梅の子塚1・2号墳やⅣ-1・2・4・5号墳が所在する上位平坦面と谷地形を挟んだ東側にある南西へ延びる舌状の上位平坦面に築造された一群である。低墳丘墳の円墳3基(Ⅴ-2～4号墳)と周溝の一部を検出した1基(Ⅴ-1号墳)の4基が検出されている。Ⅴ-1号墳は大半が削平され、一部を検出した周溝からは円筒埴輪片が出土している。Ⅴ-2～4号墳は周溝をもつ直径12.5～27mの円墳で、埋葬施設は木棺直葬である。Ⅴ-2号墳の埋葬施設は墓壙の一部が重なった上下2層の木棺直葬で、このような上下2層の埋葬施設は芝山古墳群では他にはない。Ⅴ-2・4号墳は、埋葬施設から出土した須恵

付表1 芝山古墳群編年表

時期	時期区分	埴輪・土器	古墳名	墳丘形態	被葬者	土器以外の主な副葬品／特記事項	大首長墳・有力首長墳
前期	1期以前	庄内期中段階	長池墳丘墓	不明	首長	小型銅鏡・管玉2／長池古墳築造時に破壊	—
	1期	埴輪Ⅰ期前葉	—	—	—	—	—
	2期	埴輪Ⅰ期中葉	—	—	—	—	—
	3期	埴輪Ⅰ期後葉	IV-3	方・高塚（一辺16.8）	中首長	壺形埴輪・堅櫛・鉄斧・鎌・刀子	—
	4期	埴輪Ⅱ期	IV-1・2・4・5	方・低墳丘（IV-1:一辺10.3） （IV-2:一辺15.8） （IV-4・5:方?）	小首長	IV-2: 対置式神獸鏡・勾玉・管玉	梅の子塚1号墳
5期	埴輪Ⅲ期前半	小首長			IV-4: 方格規矩八禽鏡	梅の子塚2号墳	
中期	6期	埴輪Ⅲ期後半	Ⅲ-1	方・高塚（一辺17）	中首長	円筒埴輪・形象埴輪	久津川車塚古墳
			Ⅲ-2・3	方?・低墳丘（Ⅲ-3:一辺6?）	小首長	Ⅲ-2: 蛇行剣・刀子・鉄鏃 Ⅲ-3: 鉄剣・刀子・鉄鏃	
			V-1	周溝の一部のみ	—	円筒埴輪	
	7期	TK73	Ⅱ-2・4	方・高塚（Ⅱ-2:一辺11）	小首長	—	芭蕉塚古墳
8期	TK216～208	Ⅱ-1・3	方・高塚（Ⅱ-1:一辺11.4）	小首長	—	—	
後期	9期前半	TK23～47	I-11	円・高塚（径16）	中首長	—	宮ノ平1～3号墳
			I-1	方・高塚（一辺10.4）	小首長	—	
			I-3	方・低墳丘（一辺11）	家長	—	
			I-20	円・高塚（径17.7）	中首長	—	
			I-17	円・低墳丘（径19）	小首長	鉄鏃・鉄鏝・鉄斧・曲刃鎌／棺に赤色顔料を塗布	
	9期後半	TK23～47	I-15	円・高塚（径26.7）	中首長	—	—
			I-4	円・高塚（径17.4）	中首長	—	—
			I-12	円・低墳丘（径11）	家長	—	—
	10期前半	MT15～TK10	長池古墳（Ⅶ-1）	円・高塚（径25）	中首長	金製耳環2・琥珀棗玉16以上・瑪瑙小玉・銀製空玉	—
			I-18	円・低墳丘（径20.3）	小首長	鉄刀・土玉123点以上／造り出し or 前方部あり、棺に赤色顔料を塗布	—
			I-6	円・低墳丘（径7.4）	家長	—	—
			I-13	円・低墳丘（径11.5）	家長	—	—
			V-2（下層）	円・低墳丘（径約27）	小首長	大刀・鉄鏃・ガラス製小玉／須恵器28個体副葬、棺に赤色顔料を塗布	—
			—		—	耳環・ガラス製小玉／棺に赤色顔料を塗布	—
V-4			円?・低墳丘（径14程度）	家長	大刀／棺に赤色顔料を塗布	—	
10期後半	MT85～TK43～TK209	長池古墳第3主体（Ⅶ-2）	方?・低墳丘（一辺14程度?）	首長	銀製環（指輪?）・金銅製耳環2・刀子・鉄鏃8・鉄釘・鉄紙／須恵器28個体副葬	—	
		Ⅵ-1	円・低墳丘（径9.5）	家長	—	—	
		I-8	楕円・低墳丘（径3.2～5）	家長	—	—	
終末期	11期以降	飛鳥Ⅰ	I-9	楕円・低墳丘（径3～5程度）	家長	—	—

器が陶器編年MT15型式～TK10型式に相当することから、古墳時代後期中頃に築造されたと考えられる。

Ⅵ支群はⅠ群の東側にある谷を挟んだ中位平坦面に位置し、低墳丘墳の円墳1基（Ⅵ-1号墳）が確認されている。Ⅵ-1号墳は周溝をもつ直径9.5mの小規模な円墳で埋葬施設は木

棺直葬である。出土した須恵器が陶邑編年TK43型式に相当することから、古墳時代後期後半に築造されたと考えられる。Ⅵ群については、Ⅵ-1号墳の南側には未調査地が広がっており、他にも複数の古墳が存在する可能性がある。

芝山古墳群は、古墳時代前期前半から古墳時代終末期まで連続と古墳の築造が行われている。埋葬施設は、各時期を通じて石材を用いておらず、ほとんどが木棺直葬と考えられる。前期から中期にかけては、丘陵上位平坦面に古墳が築造される。前期には一辺10～17mの低墳丘の方墳(Ⅳ支群)が築造され、中期には一辺11～17mの高塚の方墳(Ⅱ・Ⅲ支群)と一辺10m以下の低墳丘の方墳(Ⅲ支群)が築造される。後期には、上位平坦面に築造される古墳も数基(Ⅴ支群)あるが、丘陵中位平坦面に築造場所が移動する(Ⅰ支群)。後期初めには直径17m前後の高塚の円墳と一辺10m前後の高塚の方墳、一辺10m前後の低墳丘の方墳が混在している。後期前半には方墳は消滅し、円墳となる。高塚墳は、直径17～27mと最も規模が大きくなる。低墳丘墳は、高塚墳に匹敵する直径19mの古墳とそれまでの低墳丘墳と同じ規模の直径11m前後のものが混在している。後期後半に高塚墳は消滅し、低墳丘墳は直径20～27mと墳丘規模が最も大きくなる一方で、それまでと同じ規模の直径11m前後のものも築造されている。終末期には墳丘規模が縮小し直径が10m以下となり、古墳の造営は終焉する。

現在、芝山遺跡・芝山古墳群が所在する芝山丘陵では、梅の子塚1・2号墳を除いて古墳と思われる盛土遺構は確認できない。芝山丘陵では古墳時代末ごろから集落の造営が始まり、7世紀後半に大規模な造成が行われ、7世紀後半から9世紀前半ごろにかけて掘立柱建物群が造営される。芝山古墳群の多くは、7世紀後半の造成とそれ以降の掘立柱建物群の造営により、墳丘が削平されたと考えられる。

芝山古墳群は、10～20mの高塚や低墳丘の方墳や円墳で構成された中・小首長層や家長層の共通した墓域として造営されたと考えられる。未調査部分や土砂採取で削平された部分も含めると50基以上の古墳が築造されていたと推測され、久津川古墳群で最大の群集墳であり、また南山城地域においても最大級の群集墳といえる。

(2)長池古墳の概要

長池古墳は、丘陵中位平坦面から南西に延びる丘陵先端部に位置する。1964年に宅地造成工事に伴い発掘調査が実施された。丘陵先端の地山を整形した全長50mの前方後円形の古墳とされ、後円部で2基(第1・2主体)、前方部で1基(第3主体)の木棺直葬の埋葬施設が検出されている。後円部の第2主体からは金製耳環・玉類・須恵器15個体が、また前方部の第3主体からは銀製環・金銅製耳環・刀子・鉄鏃・鉄鉞・須恵器28個体・土師器1個体が出土している。築造時期は、後期中ごろとされている。

墳形については、近年、小池寛氏による墳丘測量図の詳細な検討が行われ、直径約25mの円墳とする見解が示されている(小池2014)。筆者もこれに賛同している。

ここでは発掘調査成果や墳形の検討成果をもとに、いくつかの解釈を提示してみたい。

墳丘規模は芝山古墳群内の大型円墳とほぼ同じで、埋葬施設(第2主体)も木棺直葬であることから、芝山古墳群を形成する1基と考えることができる。墳丘は盛土ではなく丘陵先端の地山を整形し、埋葬施設は地山を浅く掘り下げて構築している。地山を整形・掘削する点では低墳丘墳に共通するが、平地部との比高差は6.5mあり、平地部からは高い墳丘に見えることから、高塚墳として位置付けられる。前方部とされた平坦面で検出された第3主体は、第2主体以上の種類と数量の副葬品をもつ。このことから、第3主体は長池古墳の東側に隣接して築造された低墳丘墳の埋葬施設の可能性が高く、地形図から一辺14m程度の方墳ではないかと考えられる。またVI支群のVI-1号墳から南西に200m程離れていることから、あらたにVII支群として長池古墳をVII-1号墳、第3主体をVII-2号墳とする。

第1主体は楕円形の墓壙に白色粘土を薄く敷き、墓壙中央やや北寄りに白色粘土で造られた長さ1.5m、幅0.28～0.35mの浅いくぼみがあり、内部には朱が厚く塗布されていた。この浅いくぼみは、割竹形木棺を安置した粘土床のような形状を呈している。第2・3主体や他の木棺直葬の埋葬施設と比較すると、後期の埋葬施設としてはかなり様相を異にしている。第1主体の副葬品は浅いくぼみの南小口に置かれた須恵器短頸壺1個体のみで、第2・3主体と比べ極端に少ない。第1主体の南では小型銅鏡・管玉・庄内式土器が出土しており、これらは長池古墳築造時に破壊された庄内期の墳丘墓(長池墳丘墓)の副葬品とされている。ここで想像をたくましくするならば、長池古墳築造時に墳丘墓の埋葬施設であった第1主体が掘り返され、副葬品の小型銅鏡や管玉などが出土した。このことで、先人の墳墓が築造されていたことが認識され、出土した副葬品を墓壙外にまとめて置き、鎮魂のために短頸壺を置いて埋め戻したのではないかと考えられる。

(3)芝山古墳群の編年と被葬者

古墳編年の時期区分は、和田晴吾氏が提示された11期の区分(和田1987)を基本とし、1期(川西編年埴輪I期前葉)、2期(川西編年埴輪I期中葉)、3期(川西編年埴輪I期後葉)、4期(川西編年埴輪II期)、5期(川西編年埴輪III期前半)、6期(川西編年埴輪III期後半)、7期(陶邑編年TK73型式)、8期(陶邑編年TK216型式-TK208型式)、9期(陶邑編年TK23型式-TK47型式)、10期(陶邑編年MT15型式-TK10型式)、11期(陶邑編年MT85型式-TK43型式-TK209型式)とする。11期以降は、終末期(飛鳥・平城宮編年飛鳥I期)とする。大まかな年代観は、1期を3世紀後半、2期を4世紀前葉、3期を4世紀中葉、4期を4世紀後葉、5期を4世紀末～5世紀初め、6期を5世紀前葉、7期を5世紀中葉、

8期を5世紀後葉前半、9期を5世紀後葉後半、10期を6世紀前半、11期を6世紀後半、終末期を6世紀末～7世紀初めとする。

被葬者の首長・家長層は、広域支配を担った首長を「大首長(久津川車塚古墳・芭蕉塚古墳)」、久津川古墳群の各支群地域の支配を担った首長を「有力首長(富野支群では梅の子塚1・2号墳、宮ノ平1～3号墳)」、支群地域の一部の支配を担った首長を「中首長」、支群地域の小地域の支配を担った首長を「小首長」、首長の配下を「家長」と呼称する。

検出された古墳の墳丘規模は、概ね一辺或いは直径が17～27mと7～11mの2つに分けることができる。高塚墳においては墳丘規模が15m以上を中首長墓、15m以下を小首長墓とし、低墳丘墳においては墳丘規模が15m以上を小首長墓、15m以下を家長墓とする。

長池墳丘墓は出土した庄内式土器が庄内期中段階のものとされており、時期区分では1期以前(3世紀前半)となる。芝山丘陵に築造された最初の首長墓で、芝山丘陵が首長層の墓域となる契機になったと考えられる。同じ時期には、久世支群で芝ヶ原古墳が築造される。1期以前に久世地域と富野地域を治める首長が、それぞれ出現したことを示している。

1～2期に該当する古墳は芝山古墳群も含め久津川古墳群ではみつかっておらず、首長層の空白期となっている。これは、南山城地域南部に椿井大塚山古墳を築造したヤマト王権の中樞を担った大首長が存在したことが影響しているものと考えられる。

3期にはIV-3号墳(高塚/方墳/17m)が築造され、富野地域を治める首長が再び現れたことを示している。長池墳丘墓と立地や墳丘構造が似かよっており、空白期はあるものの、被葬者は長池墳丘墓の首長の系譜を引き継いだ首長と考えられる。

4期には梅の子塚1号墳、5期には梅の子塚2号墳が築造される。梅の子塚1・2号墳の被葬者は、ヤマト王権と強く結びつくことで富野地域を中心とする城陽市域南半を治めた在地の有力首長で、二代にわたり地域支配を行ったと考えられる。4～5期には、梅の子塚1・2号墳の南側にIV-1・2・4・5号墳(低墳丘/方墳/10～16m)が築造される。被葬者は、有力首長の支配のもとで小地域を治めた小首長と考えられる。

6期には久世支群に大首長墳である久津川車塚古墳が築造され、南山城地域を支配する大首長が出現する。広野・富野支群では有力首長墓は築造されず、広野・富野地域を治める有力首長が存在しなかったことを示している。6期にはⅢ-1号墳(高塚/方墳/17m)が築造され、被葬者は大首長の支配のもとで富野地域を治めた中首長と考えられる。

7～8期には、大首長による広域支配が継続し、久世支群に大首長墳である芭蕉塚古墳が築造される。7期のⅡ-2・4号墳(高塚/方墳/11m)からは初期須恵器が出土しており、被葬者は新来の須恵器を伴う新たな埋葬儀礼を取り入れた小首長と考えられる。8期のⅡ-1・3号墳(高塚/方墳/11m)の被葬者は、7期の小首長の後継と考えられる。7～8期

には、大首長による地域支配は継続し、中首長に代わって複数の小首長がそれぞれ小地域を治めていたと考えられる。

9期には大首長による広域支配が終焉し、有力首長による各地域の支配が復活する。富野支群では大河原川北側の丘陵上に宮ノ平1～3号墳(方墳2基/29m・31m、円墳1基/33m)が築造され、被葬者は富野地域を治めた三代にわたる有力首長と考えられる。芝山古墳群では、9期から芝山丘陵の中位平坦面に集中して古墳が築造されはじめ、後期群集墳が形成される。9期前半には、I-11号墳(高塚/円墳/16m)、I-1号墳(高塚/方墳/10m)、I-3号墳(低墳丘/方墳/11m)が築造される。I-11号墳の被葬者は有力首長配下の中首長、I-1号墳の被葬者は中首長配下で7～8期のII-1～4号墳の被葬者の後継となる小首長、I-3号墳の被葬者は小首長配下の家長と考えられる。9期前半には首長の階層化が進むとともに、その配下の家長にも古墳の築造が広がる。9期後半にはI-20号墳(高塚/円墳/18m)、I-17号墳(低墳丘/円墳/19m)が築造され、I-20号墳の被葬者はI-11号墳の後継となる中首長、I-17号墳の被葬者は中首長配下の小首長と考えられる。この段階で小首長墓は円墳化し、低墳丘墳に大型化したものが現れる。

10期には古墳の築造数が最も多くなり、これは9期からはじまる首長の階層化と家長への古墳築造の広がり反映されたものと考えられる。その一方で富野支群では有力首長墓はみられず、富野地域を治める有力首長が姿を消したと考えられる。10期前半にはI-15号墳(高塚/円墳/27m)が築造され、中首長墓である高塚墳は最も大型化する。その一方で、I-4号墳(高塚/円墳/17m)のように9期と同規模の中首長墓も築造されている。このようなことから、有力首長の消滅に伴い複数の中首長による地域支配が行われるようになるが、その中でより優位な中首長が存在していたと考えられる。10期後半には、中位平坦面から延びる丘陵先端部に長池古墳(VII-1号墳/高塚/円墳/25m)が築造される。この時期の高塚墳は長池古墳のみで、他はすべて低墳丘墳である。中位平坦面のI支群ではI-18号墳(円墳/20m)、I-13号墳(円墳/11m)、I-6号墳(円墳/7m)、上位平坦面のV支群ではV-2号墳(円墳/27m)とV-4号墳(円墳/?/14m?)が築造される。低墳丘墳は直径が15m以上の大型墳(I-18号墳・V-2号墳)と直径が15m以下の小型墳(I-13・6号墳、V-4号墳)があり、低墳丘墳はこの時期に最も大型化する。長池古墳は、10期前半まで中首長墓が築造されていた場所から離れた平地を見下ろす位置に築かれている。また、それまでの中首長墓にはみられなかった金製耳環や豊富な玉類を副葬している。被葬者は墳丘規模から中首長と考えられるが、ヤマト王権との直接的な関係を強めたことで富野地域の支配を単独で担った中首長と考えられる。I-18号墳とV-2号墳は低墳丘墳ではあるが、長池古墳に近い墳丘規模をもち、それまでの低墳丘墳にはみられなかった鉄製武器類や玉類を

副葬している。被葬者は墳丘形態から小首長と考えられるが、それまでの配下的な立場ではなく中首長の地域支配を補佐する立場にあったと考えられる。また長池古墳には副葬されていない鉄製武器類が副葬されており、武人的立場から補佐していたと考えられる。I-13・6号墳はI-18号墳、V-4号墳はV-2号墳の小首長配下の家長層と考えられる。特にV-4号墳は鉄製武器類を副葬しており、V-2号墳の小首長と同じく武人的性格を有していたと考えられる。

11期には長池古墳第3主体(VII-2号墳/方?/14m?)、VI-1号墳(低墳丘/円墳/10m)、I-8号墳(低墳丘/楕円墳/3~5m)が築造される。長池古墳第3主体からは豊富な副葬品が出土しており、長池古墳の中首長の後継と考えられる。しかし墳丘は低墳丘となり、墳丘規模も大きく縮小しており、小首長と考えられる。VI-1号墳とI-8号墳も墳丘規模が縮小しており、長池古墳第3主体の小首長配下の家長と考えられる。この時期には、低墳丘墳のみとなり、墳丘規模も縮小し、築造数も減少する。長池古墳第3主体を最後に富野地域では首長墓は築造されず、長池古墳第3主体の被葬者は富野地域を治めた最後の首長と考えられる。

11期以降(終末期)では、I-9号墳(低墳丘/楕円墳/3~5m程度)が築造される。芝山古墳群で最後に築造された家長墓と考えられ、この時期で芝山古墳群の造墓活動は終焉する。11期で在地首長による富野地域の支配は終焉したものの、家長による造墓活動が存続していたと考えられる。

最後に芝山古墳群での主な首長墓系譜を列記する。

1期以前:長池墳丘墓(首長の出現)➡1~2期:首長空白期➡3期:IV-3号墳(首長の再出現)➡4~5期:IV-1・2・4・5号墳(有力首長配下の小首長)➡6期:III-1号墳(大首長配下の中首長)➡7期:II-2・4号墳(大首長配下の小首長)➡8期:II-1・3号墳(大首長配下の小首長)➡9期前半:I-11号墳(有力首長配下の中首長)➡9期後半:I-20号墳(有力首長配下の中首長)➡10期前半:I-15号墳(中首長)➡10期後半:長池古墳(中首長)➡11期:長池古墳第3主体(最後の首長)

3. 久津川古墳群における後期古墳の様相

ここでは芝山古墳群で後期群集墳が形成される9期~11期の広野支群と久世支群の様相をみていきたい。

(1) 広野支群

9期には宇治市伊勢田地域の平地部に若林2号墳(高塚/方墳/8m/木棺直葬)が築造されるが、有力首長墓や中首長墓はみられない。大首長による広域支配の終焉後には、ヤマ

ト王権支配下の小首長層による小地域ごとの支配が行われていたと考えられる。

10期には宇治市広野地域の丘陵先端に坊主山1号墳(高塚/前方後円墳/全長45m/木棺直葬)が築造される。坊主山1号墳は、墳丘形態や規模、出土した副葬品から有力首長墓と考えられ、ヤマト王権と深く結びついた有力首長が復活したことを示している。

11期には坊主山1号墳に隣接して坊主山2号墳(高塚/円墳/25m/木棺直葬)が築造され、築造場所や出土した副葬品から坊主山1号墳の有力首長の後継と考えられる。

宇治市大久保地域の名木川扇状地には、且椋1～6号墳(高塚/円墳5基/10～20m/木棺直葬(推定)・高塚/方墳1基/9m/木棺直葬(推定))が築造される。しかし、周溝埋土からTK209型式の須恵器が出土した1号墳を除いて出土遺物はほとんどなく、築造時期は明確ではない。この他に大久保・広野地域では、3か所で須恵器や鉄製の刀などの鉄製品が出土した記録がある。

10期～11期には名木川扇状地とその周辺に多くの中・小首長墓が築造されていた可能性が高く、有力首長支配下の中・小首長層が存在していたと推定される。

11期末ごろには、それまで古墳が築造されていなかった宇治市小倉地域の巨椋池を望む丘陵斜面に宇治西山古墳(高塚/円墳/16～18m/両袖式横穴式石室)が築造される。被葬者は、11期末に新たに台頭した有力首長と考えられる。

11期以降(終末期)には、伊勢田地域の平地部に伊勢田塚古墳(低墳丘?/陶棺直葬)が築造される。有力首長や中首長が姿を消すなかで、小地域を治める小首長がこの時期まで存続していたことを示している。

(2)久世支群

築造時期が明らかな後期古墳は極めて少なく、11期の2基と11期末～11期以降(終末期)の3基のみで、9～10期では確認されていない。

芝ヶ原1～7号墳は、城陽市平川地域の太谷川扇状地南側丘陵に立地する。芝ヶ原1～4号墳(低墳丘/円墳/16～18m)は丘陵先端に墳丘裾部を接するように築造され、芝ヶ原6号墳(高塚/前方後円墳/全長35m)・芝ヶ原5号墳(高塚/帆立貝形古墳/全長22m)・芝ヶ原7号墳(高塚/円墳/18m)は丘陵先端から東へ広がる平坦部にやや間隔を開けて築造されている。芝ヶ原1～7号墳は、未調査のため築造時期や埋葬施設を知る手がかりはないが、墳丘形態や石材の露出がないことから10期に築造された木棺直葬を埋葬施設とする古墳と推定される。芝ヶ原5～7号墳は墳丘形態や規模から有力首長墓と位置付けられるが、墳丘形態や規模の違いは有力首長の序列によるものと考えられる。丘陵先端に密集して築造される芝ヶ原1～4号墳は、墳丘形態や規模から芝ヶ原5～7号墳の有力首長配下の小首長墓と考えられる。

上大谷1～5号墳は、大谷川扇状地最奥部の北側丘陵斜面に立地し、上大谷1号墳(高塚/前方後方墳/全長33m)・2～5号墳(低墳丘/円墳/11～18m)で構成される。埋葬施設は、墳丘形態や石材の露出がないことから木棺直葬と推定される。墳丘形態や規模から上大谷1号墳は有力首長墓、上大谷2～5号墳は上大谷1号墳の有力首長配下の小首長墓と考えられる。試掘調査で3号墳の墳丘裾部からMT85型式の須恵器杯身片が出土しており、築造時期は11期前半と推定される。このことから上大谷1号墳の有力首長は、芝ヶ原5～7号墳の有力首長の後継と位置付けられる。

11期には、大谷川扇状地を中心とした平地部に恵美塚古墳(低墳丘/方墳/14m/木棺直葬)が築造される。また2018年の芝ヶ原遺跡の調査(18-1tr)では、地山の上に小礫を敷き、その上に木棺を安置した埋葬施設(S X101)がみついている。低墳丘墳と考えられるが、墳形や規模は不明である。埋葬施設からは須恵器の他、耳環や鉄製品などが出土している。これらは、出土した副葬品から小首長墓と考えられる。東垣外古墳は低い墳丘状の高まりが残存しているが、未調査のため詳細は不明である。墳丘上で須恵器片(TK43型式)が採集されており、11期に築造された低墳丘墳の可能性がある。

大谷川扇状地とその周辺には、指月塚古墳、欠山古墳、北垣内1～3号墳、南垣内1～4号墳が存在したことが知られている。これらは早くに削平され詳細はわからないが、指月塚古墳と南垣内2号墳では削平時に須恵器や鉄製の刀などが出土したとの伝聞がある。これらは、地表に墳丘盛土が存在したことにより古墳として認識されていたと考えられ、また石材に関する伝聞もないことから、木棺直葬の高塚墳であったと推定される。

10期～11期には、大谷川扇状地やその周辺に多くの中・小首長墓が築造され、有力首長支配下の中・小首長層が存在していたと推定される。

11期末～11期以降(終末期)には、大谷川扇状地最奥部の北側丘陵上及び斜面に横穴式石室を埋葬施設とする上大谷12号墳(高塚/方墳/15m/両袖式横穴式石室)、14号墳(高塚/方墳/18m)、17号墳(高塚/円墳/14m/左片袖式横穴式石室)が築造される。上大谷14号墳は未調査であるが、墳丘形態・規模から上大谷12号墳と同様の横穴式石室をもつと推定される。大谷川扇状地の南側丘陵南斜面に立地する尼塚5号墳(高塚/円墳/8m/横穴式石室)は、石室床面の炭敷きから和同開珎1枚が出土している。これらの横穴式石室を埋葬施設とする古墳は、11期末に新たに台頭した有力首長により築造されたと考えられ、古墳の築造が8世紀初めまで行われていたことを示している。

4. まとめ

広野・久世支群では、平地部に多くの後期古墳が築造されていたと考えられる。しかし

開墾や市街地化でその多くが削平され、その実態は明確ではない。ここでは富野支群の芝山古墳群で明らかとなった後期古墳の様相を参考に、久津川古墳群全体での後期古墳(9期～11期以降)の様相とそれらを築造した首長層の動向を推論してみたい。

ヤマト王権は、7期頃から勢力下の各地域で大首長を排除して、より直接的な地域支配をすすめるようになり、この直接的な地域支配は8～9期にも継続する。久津川古墳群では8期に大首長が姿を消し、ヤマト王権による直接的な地域支配が行われたと考えられる。9期の広野・久世支群では有力首長墓や中首長墓はみられず、ヤマト王権支配下の小首長による小地域支配が行われていたと考えられる。一方、富野支群では有力首長墓である宮ノ平1～3号墳が、芝山古墳群に中首長墓・小首長墓・家長墓が築造される。富野地域で有力首長による地域支配が復活し、その有力首長を頂点に中首長・小首長・家長の階層制による地域支配が行われはじめたと考えられる。

10期には、広野支群で坊主山1号墳、久世支群で芝ヶ原6号墳が築造され、広野・久世地域でも有力首長による地域支配が復活する。ヤマト王権の地域支配体制が、有力首長を介した間接的なものに変化したと考えられる。広野地域の名木川扇状地とその周辺、久世地域の大谷川扇状地とその周辺には後期群集墳が形成されるが、その実態は不明である。しかし芝山古墳群を参考にすると、多くの高塚墳や低墳丘墳が築造されていたと推定される。広野・久世地域においても、ヤマト王権と強く結びついた有力首長を頂点に中首長・小首長・家長の階層制による地域支配が行われていたと考えられる。一方、富野地域では有力首長墓がみられないことから、久世地域の有力首長による地域支配が富野地域にも及んでいたのではないかと考えられる。

11期には、広野・久世支群の有力首長墓は規模の縮小や円墳化する。芝山古墳群を参考にすると、中・小首長墓も規模の縮小や低墳丘化し、築造数も減少する。広野地域と久世・富野地域の有力首長による地域支配は継続するが、支配下の中首長は姿を消し、小首長・家長層も減少したと考えられる。11期末までには、久津川古墳群の造墓活動はほぼ終焉し、古墳時代前期から連綿と続いてきた在地首長による地域支配は終わりを告げる。

11期末～11期以降(終末期)には、広野・久世支群で横穴式石室を埋葬施設とする古墳が築造される。これらを築造したのはヤマト王権と強く結びついた新来の有力首長で、確立されつつあった律令体制に基づいて地域支配を担う官人的な性格をもっていたと考えられる。また、それまで墓域であった名木川・大谷川扇状地や芝山丘陵を含めた周辺丘陵上に集落が出現する。これらの集落は、新来の有力首長に率いられた入植者集団により造営されたものと考えられる。その後、久世・広野地域では新来の有力首長の系譜に連なる有力者により久世廃寺・平川廃寺・広野廃寺の造営が行われ、久世郡衙(正道官衙遺跡)の設置

付表2 久津川古墳群後期古墳編年表1

支群	時期区分	古墳名	墳形	規模 (m)	墳丘形態等	埋葬施設	棺の形態	出土須恵器	被葬者	
広野支群	9期	若林2号墳	方墳	一辺約 8	高塚墳・周溝	-	-	TK47	小首長	
		坊主山1号墳	前方後円墳	全長約 45	高塚墳(丘陵先端部の地山を整形)	木棺直葬	組合式木棺	MT15 ~ TK10	有力首長	
		若林1号墳	方墳	一辺約 14	高塚墳・周溝	-	-	TK10	小首長	
	11期	坊主山2号墳	円墳	径約 25	高塚墳(丘陵先端部の地山整形後に盛土)	木棺直葬(東棺) 木棺直葬(西棺)	組合式木棺 組合式木棺	MT85 ~ TK43	有力首長	
		且栂1号墳	円墳	径約 20	高塚墳・周溝	木棺直葬	-	TK209	中首長	
		宇治西山古墳	円墳	推定径 18程度	高塚墳	横穴式石室	-	-	有力首長	
		伊勢田塚古墳	不明	-	低墳丘墳?	陶棺直葬	陶棺	-	小首長	
	久世支群	11期以降	芝ヶ原6号墳	前方後円墳	全長約 35	高塚墳	木棺直葬?	-	-	有力首長
			芝ヶ原5号墳	帆立貝形古墳	全長約 22	低墳丘墳	木棺直葬?	-	-	有力首長
			芝ヶ原7号墳	円墳	径約 18	低墳丘墳	木棺直葬?	-	-	有力首長
10期		芝ヶ原1号墳	円墳	径約 16	低墳丘墳・北側に掘り割り状の溝	木棺直葬?	-	-	小首長	
		芝ヶ原2号墳	円墳	径約 18	低墳丘墳・南から南東側に掘り割り状の溝	木棺直葬?	-	-	小首長	
		芝ヶ原3号墳	円墳	径約 17	低墳丘墳・北西側と東側に掘り割り状の溝	木棺直葬?	-	-	小首長	
		芝ヶ原4号墳	円墳	径約 16	低墳丘墳・南東側に掘り割り状の溝	木棺直葬?	-	-	小首長	
11期		上大谷1号墳	前方後方墳	全長約 33	低墳丘墳・北及び東側に掘り割り状周溝	木棺直葬?	-	-	有力首長	
		上大谷2号墳	円墳	径約 18 (高さ 3)	高塚墳(南側に造り出し部)・周溝	木棺直葬?	-	MT85	小首長	
		上大谷3号墳	円墳	径約 12	低墳丘墳・周溝	木棺直葬?	-	-	小首長	
11期以降	上大谷4号墳	円墳	径約 11	低墳丘墳(南側に造り出し部)・周溝	木棺直葬?	-	-	小首長		
	上大谷5号墳	円墳	径約 11	低墳丘墳(南側に造り出し部)・周溝	木棺直葬?	-	-	小首長		
	恵美塚古墳	方墳	一辺約 14	低墳丘墳・周溝	木棺直葬	-	MT85 ~ TK43	小首長		
	芝ヶ原遺跡 18-1tr SX 101	-	-	低墳丘墳	木棺直葬	-	MT85 ~ TK43	小首長		
11期以降	東垣外古墳	円墳?	不明	低墳丘墳?	木棺直葬?	-	TK43	小首長?		
	上大谷12号墳	方墳	15 × 10	高塚墳・コの字状の掘り割り	横穴式石室	組合式木棺	TK209 ~ TK217	有力首長		
	上大谷14号墳	方墳	15.5 × 18	高塚墳・コの字状の掘り割り	横穴式石室?	-	-	有力首長		
	上大谷17号墳	円墳	径約 13	高塚墳・周溝	横穴式石室	組合式木棺	TK209	有力首長		
		尼塚5号墳	円墳	径約 8	高塚墳・北側及び西側に掘り割り状の溝	横穴式石室	-	有力首長		

付表3 久津川古墳群後期古墳編年表2

支群	時期区分	古墳名	墳形	規模 (m)	墳丘形態等	埋葬施設	棺の形態	出土須恵器	被葬者
富野支群	9期前半	芝山 I -11 号墳	円墳	径 16.0	高塚墳・周溝	-	-	TK23・47	中首長
		芝山 I -1 号墳	方墳	10 × 10.4	高塚墳・周溝	-	-	TK47	小首長
		芝山 I -3 号墳	方墳	11 × 10	低墳丘墳・周溝	木棺直葬	組合式木棺	TK47	家長
	9期後半	芝山 I -20 号墳	円墳	径 17.7	高塚墳・周溝	-	-	TK47	中首長
		芝山 I -17 号墳	円墳	推定径 19.0	低墳丘墳・周溝	木棺直葬	組合式木棺	TK47 ~ MT15	中首長
		宮ノ平4号墳	方墳	一辺 15.5	高塚墳・周溝	-	-	TK47	中首長
	10期前半	宮ノ平5号墳	方墳	一辺 10.5	高塚墳・周溝	-	-	TK47	小首長
		芝山 I -15 号墳	円墳	径 26.7	高塚墳・周溝	-	-	MT15	中首長
		芝山 I -4 号墳	円墳	径 17.4	高塚墳・周溝	-	-	MT15	中首長
	野支群	10期前半	芝山 I -12 号墳	円墳	径 11.0	低墳丘墳・周溝	木棺直葬	組合式木棺	MT15
長池古墳 (芝山VII-1号墳)			円墳	径約 25	高塚墳(丘陵先端部の地山を整形)	木棺直葬	-	TK10	中首長
10期後半		芝山 I -18 号墳	円墳	径 20.3	低墳丘墳(造り出し or 前方部あり)・周溝	木棺直葬	組合式木棺	TK10	小首長
		芝山 I -6 号墳	円墳	径 7.4	低墳丘墳・周溝	木棺直葬	組合式木棺	TK10	家長
		芝山 I -13 号墳	円墳	径 11.5	低墳丘墳・周溝	木棺直葬	箱形木棺?	TK10	家長
		芝山 V -2 号墳	円墳	径約 27(復元)	低墳丘墳・周溝	木棺直葬(上層)	組合式木棺	TK10	-
		芝山 V -4 号墳	円墳?	径 14 程度	低墳丘墳・周溝	木棺直葬	箱形木棺	TK10	小首長
		柏平古墳	円墳?	径 20 程度	低墳丘墳・周溝	木棺直葬	組合式木棺	MT15 ~ TK10	家長
11期以降		長池古墳第3主体 (芝山VIII-2号墳)	(方墳?)	(一辺 1m 程度?)	土壇墓(低墳丘墳の可能性あり)	木棺直葬	-	TK10	小首長
		芝山 VI -1 号墳	円墳	径 9.5	低墳丘墳・周溝	木棺直葬	-	TK43	小首長
11期以降	芝山 I -8 号墳	楕円形墳	径 3.2 ~ 5.0	低墳丘墳・周溝	木棺直葬	組合式木棺	TK43	家長	
	芝山 I -9 号墳	楕円形墳	径 3.0 ~ 5.0 程度	低墳丘墳・周溝	木棺直葬	組合式木棺	TK43	家長	

につながったと考えられる。

芝山古墳群の発掘調査は、久津川古墳群における後期古墳の様相を知る貴重な成果となった。また、ヤマト王権による地域支配体制や地域支配を担った在地の首長層の首長層の変遷を推論する貴重な資料となった。

(こいずみ・ひろし = 当調査研究センター調査課副主査)

参考文献

- 京都府教育委員会 1965 「6. 長池古墳発掘調査概要」、 「8. 坊主山古墳発掘調査概要」 『埋蔵文化財発掘調査概報』
- 京都府教育委員会 1969 『埋蔵文化財発掘調査概報』
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 「芝山遺跡」 『京都府遺跡調査概報』 第25冊
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004 「4. 芝山遺跡」 『京都府遺跡調査概報』 第110冊
- (公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2023 「新名神高速道路整備事業関係遺跡 芝山遺跡・芝山古墳群」 『京都府遺跡調査報告集』 第189冊
- (公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2025 「2. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-3区)発掘調査報告」 『京都府遺跡調査報告集』 第196冊
- 宇治市教育委員会 1995 「旦棕遺跡第1次発掘調査概報」 『宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書』 第28集
- 宇治市教育委員会 2010 「西山古墳発掘調査報告書」 『宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書』 第81集
- 宇治市歴史資料館 2007 『旦棕遺跡第5次発掘調査の成果』 現地説明会資料
- 城陽市教育委員会 2010 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第60集
- 城陽市教育委員会 2011 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第62集
- 城陽市教育委員会 2012 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第64集
- 城陽市役所 1999 『城陽市史』 第三巻
- 城陽市役所 2002 『城陽市史』 第一巻
- 城陽市教育委員会・井手町教育委員会 2012 『茶臼塚古墳発掘調査現地説明会資料』
- (財) 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室 1977 「京都府城陽市上大谷古墳群の調査－試掘調査報告書－」 『考古学研究室調査報告』 第1冊
- 奈良大学文学部文化財学科 2020 「坊主山古墳群出土品報告書」 『奈良大学考古学調査報告書』 第25冊
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 古代の土器研究会 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』
- 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆 編 2011 『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』 同成社
- 小池寛 1991 「南山城地域の後期古墳の一樣相－城陽市・長池古墳を中心として－」 『京都府埋蔵文化財情報』 第40号 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 小池寛 2014 「京都府南山城地域における古墳出現期の一樣相」 『京都府埋蔵文化財情報』 第124号 (公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 小泉裕司 2005 「久津川古墳群の範囲と構成の再検討」 『龍谷大學考古学論集Ⅰ』 龍谷大學考古学論集刊行会
- 小泉裕司 2020 「久津川古墳群の再検討－最近の発掘調査及び研究成果から－」 『龍谷大學考古学論集Ⅲ』 龍谷大學考古学論集刊行会
- 小泉裕司 2021 「久津川古墳群の動向」 『椿井大塚古墳と久津川古墳群』 季刊考古学別冊34 雄山閣
- 小泉裕司 2021 「南山城地域における後期有力首長墓の動向－久津川古墳群を中心に－」 『京都府埋蔵文化財論集第8集－創立四十周年記念誌－』 (公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター